

脳を創る「紙の本」の効用

酒 さか井 い邦 くに嘉 よし

本とインターネットは何が違うか

インターネットで手軽に文章が読めるようになつたためか、本を読む習慣が失われようとしている。全国大学生活協同組合連合会による「学生生活実態調査」によれば、大学生の約半数で、一日の読書時間が「ゼロ」という状態がこの数年続いている。街角の本屋は次々と姿を消し、出版社の経営も紙の本や雑誌だけでは成り立たないところまで来ているという。いくら良い本を書いても読者に届かないとなれば、書き手も激減するだろう。紙の本が不要な時代になつてしまつたのだろうか。

「読書」とは「本を読むこと」であるが、それでは「本」とは何だろう。『三省堂国語辞典、第八版』（三省堂、二〇二二）には、「文章・絵などをかいたり印刷したりした紙のたばを、厚みが出るくらい重ねてとじ、きちんととした表紙をつけたもの」という詳細な語義が載っている。つまり製本と装丁は本に必須であり、電子書籍は別物ということだ。

先ほどの大学生協の調査には註釈があり、「電子書籍を含むが、読書の定義は限定していない」とある。インターネット上の記事を読むことを読書と見なした

大学生はいないだろうが、教科書や専門書を読むことは読書と見なされた可能性がある。半数もの大学生が全く読書をしないというのだから、そのように願うしかあるまい。

その一方で、マンガ本を読むことは読書時間に含めなかつたのだろうか。いまやマンガもスマートなどで読む時代なのかもしれない。ただし、スマートの画面にはマンガがページごとに分断され、常に縦型で表示されるため、見開きで描かれた元の文脈を損なう可能性がある。実際、ページの単独提示では、見開きの状態でマンガを読んでいるときと比較して、視覚野や小脳の活動が半分以下にまで減弱することが明らかとなつた（八木橋正泰＆酒井邦嘉「マンガの文脈による心的状態を反映した脳活動」*Brain and Nerve* 73, 79-87, 2021）。レイアウトを変えただけで、内容の理解にまで影響が及ぶのである。

それでは、本とインターネットでは何が違うのだろうか。以前、私は次のように整理したことがある。「インターネット上の情報と、本や雑誌などの出版物とはどこが大きく違うのだろうか。最大の違いは、記名・審査・保存の有無にある」（『科学者という仕事』中公新書、二〇〇六）。

インターネット上の記事は筆者が誰か明記されないことが多い。本にペンネームが使われることはあるが、出版社から見れば文責の所在は明らかである。そして本では、出版社の責任の下で、字句から内容に至るまで審査や校正が加えられる。公的な記事であればインターネット上でもきちんと精査されているだろうが、一般のサイトでは保証されない。さらに、インターネット上の記事がいつまで適切に保存され、アクセス可能かは定かでない。ニュース記事は一定期間を経て削除される。ただ一方で、たとえフェイクニュースであっても拡散されて消去不能となることがある。図書館や一般の家庭で保存される本とは根本的に異なるのだ。

読書はどのように脳を創るのか

「紙の本」が危機に瀕するようになり、特に電子教科書の普及を憂えた出版社から、私に執筆依頼が来た。そこで書いたのが『脳を創る読書——なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』（実業之日本社、二〇一二）である。読書がどのように「脳を創る」かというと、主に次のような過程が考えられる。

第一に、読書を通して言葉の意味を補う「想像力」が自然に高められる。想像力は、書かれたことを超えて「行間を読む能力」と言い換えることができ、文意

や書き手の意図を的確に解釈する力でもある。この「眼光紙背に徹する」力は、読書の経験によって磨かれていく。

第二に、読書を通して思索に耽ることで、自分の言葉で考える力が自然と身につく。文字の情報は脳で音声化され記憶の貯蔵庫からさまざまな概念を引き出しながら、思考を形成してゆく。これは大学生にとって最も必要とされる過程であろう。自分で考える前にインターネットを検索する習慣は、できるだけなくしたいものだ。

そして第三に、読書経験を通して、脳が変化し成長する。この過程も生涯続くものであり、人生を豊かにしてくれる。一回限りの人生で実際に体験できることは限られているが、読書を通してさまざまな生き方にについて考えたり、コミュニケーションをしたりするのは楽しい。

なぜ「紙の本」なのか

『脳を創る読書』を書いたくらいだから、ミイラ取りがミイラにならないよう電子書籍の出版を封印していた私だが、二年前に出した本『勉強しないで身につく英語——脳科学による画期的メソッド』PHP研究所、二〇一二）は、海外で困っている読者にも届く

ようにと電子化に踏み切つてみた。だが手応えはない。

さて、紙の本は製本されることでページの手がかりが豊富だから、登場人物の描写や伏線などを確認したいとき、ページをぱらぱらとめくるだけで前のページをすぐに参照できる。同じことを電子書籍リーダーのスクロールバーやページ数を頼りにやるのはかなり難しい。このことを考えただけでも、繰り返し読む必要のある教科書は、やはり「紙」でなくてはならない。

また、大きな紙は一覧性に優れる。新聞紙を広げたとたんに、多くの情報が一挙に目に入る。その次は関心のある記事に自然と目が行くことだろう。ときには、小さな死亡欄が目に飛び込んでくることもある。特に意識することなく、脳は紙面を一瞬でサーチしてくれるのだ。検索したい言葉を一々打ちこむ必要がないことも、新聞紙の方がインターネット記事に勝る点である。

ページをめくる楽しみ

高校時代の私の読書体験は、AINシユタインに関する本や、朝永振一郎の全集だった。それが大学に入つて、寺田寅彦と夏目漱石の全集に変わった。最近はミステリーに傾倒していて、謎解きで味わう意外性

はもちろん、人がなぜ嘘をつくのかに興味を持っている。ミステリー作家である道尾秀介さんの講演を聴いたことがあるが、ページをめくったときに「あつ」と言わせるように、見開きページの中で文章の長さを調整しているそうだ。もし読者が自分で電子書籍でフォントサイズを変えてしまい、レイアウトが変更されたら、その効果は台無しになってしまう。

その趣向の極みが、『いけない』（文藝春秋、二〇一九）という作品だ。各章の最後のページをめくったところに、一枚の写真が挿入されている。それを見たどたん、「はつ」と想定外の真相に気づくだろう。私の場合、話によつては多少時間要するものもあつたが、書かれていない結末を自分で推理して頭の中に話を再構築した方が、読後感が格段に強まる感じだ。この読書体験は新鮮かつ強烈なもので、ストーリーの細部に至るまで、容易には忘れそうにない。

その続編（『いけないII』文藝春秋、二〇二二）は、さらに冴えた展開を見せている。道尾さん曰く、「いけない」を超えるのは無理ではないかとさんざん言わされました。やり遂げました。超えました。」そして、『フォトミステリー』（ワニブックス、二〇二三）では、逆に既存の写真に文を添えることで新たな物語を作り上げており、中には複数の写真の間で呼応する物

語もある。ミステリー好きには、道尾さんの構想と執筆による『DETECTIVE X CASE FILE #1 御仮の殺人』（SCRAP出版、二〇二二）を薦めたい。これは紙の検査資料とスマホの両方を駆使するゲーム作品だ。エンディングムービーが巧妙に隠されていて、その最後まで気が抜けない。

『いけない』から遡ること十年。『龍神の雨』（新潮社、二〇〇九）では、随所に挿入されるラジオニュースが無関係な内容に聞こえていながら、その文脈を手がかりとして読み直すと、真相が大きく変容して解釈されるという趣向になつていた。

さらに『N』（集英社、二〇一二）は、六章の順番を自由に選択して読むことで、七百二十通りもの読み方ができるという実験的な小説である。それぞれは独立した話になつているが、各章にちりばめられた登場人物や動物たちが、自然と新たな文脈を生み出し、見事に物語をつむいでいく。それらは壮大な文脈を作り上げながら、最後に読む章の読後感を高めてくれる。

この効果を一般化してとらえると、同じ作家の作品群をどの順番で読むかによつても、読後感が変化しうるだろう。そこで、新たな読書法を提案したい。好きな作家が見つかったら、「紙の本」で数冊を同時に購入する。そのカバーや帯文、そしてリード文などを手

がかりにして、自分なりに読む順番を決めて書棚に並べる。気が変わったら途中で順番を替えてもいいが、どの本から読み始めるか、最後はどの本で終わらせるかが肝心だ。記憶の再生は、最初（初頭効果）と最後（新近効果）が他よりも正確になるから、その分だけ読後感も強くなる。その結果、自分だけの特別な物語を体験できるだろう。

たとえ読む本が限られていても、読書の楽しみは無限に変化しうるのである。

（東京大学大学院総合文化研究科教授、東大・理博・理・昭62）